2025/12/24

令和７年度　長崎県考古学会大会

ー西北九州地域における貝塚遺跡の研究成果と今後の展望ー

１　開催日　　2025 年 12 月 20 日（土）,21 日（日）
２　開催場所　諫早市立図書館ホール
　　諫早市美術歴史館

３　基調講演　福永将大（九州大学総合研究博物館）

【講演概要】

本日は、西北九州地域における縄文貝塚の分析を通して、当時の居住・生業、そして社会の変動について考えていきたいと思います。

ご存じのように、貝塚は縄文研究において極めて重要な資料で、人工遺物だけでなく、貝類・魚骨・獣骨といった自然遺物から古環境や生業活動を復元できます。

立地環境として縄文海進が知られています。特に東京湾の貝塚の立地が著名で、埼玉など内陸部に貝塚が形成されています。縄文海進は縄文前期が盛期で今から 7,400 年から 5,000 年前のことになります。海水準の変動の原因は温暖化や寒冷化あるいはハイドロアイソスタシーなどが指摘されていますが、はっきりとは分かっていません。

貝塚は全国的に見ると関東に偏在しますが、九州は比較的多く、特に西北九州は密集域を形成しています。これは、この地域の集団が水産資源を積極的に利用していたことを示唆します。

九州の貝塚研究はエドワード・S・モースの熊本県大野貝塚調査（1879）に始まります。有名なモースの大森貝塚の調査から、わずか２年後のことです。その後も土器編年や自然遺物分析を通じて貝塚研究が発展してきました。

1970 年代以降は、貝類構成比や生息環境の分析が進み、環境変動と生業の関係が議論されるようになります。

山崎純男氏の発展段階モデル、木村幾多郎氏の A～D 類型、中尾篤志氏の群集別組成の時空間分析などが、現在の理解の基盤となっています。

今回の分析対象は、西北九州沿岸の 11 貝塚で、いずれも数量データが公表されている遺跡です。

九州で最古の貝塚は縄文早期の福岡市浜の町貝塚です。地表下８㍍で 塞ノ神式土器が出土しています。

前期には遠賀川下流域と糸島半島で複数の貝塚が形成されます。前者が山鹿、新延（にのぶ）、楠橋の各貝塚、後者が天神山貝塚です。しかし継続期間には大きな差があり、後期まで継続するのが山鹿、新延貝塚で、楠橋、天神山貝塚は途絶します。

後期になると貝塚の形成が活発化し、これまで形成されなかった地域でも貝塚が作られようになります。しかし、多くは短期間で終わり、後期中葉の北久根山第二型式、長崎県では宮下式の時期に九州地域全体で貝塚が消滅します。

長期間継続する山鹿・新延貝塚はむしろ例外的で、九州の貝塚の特徴として「短期形成」が指摘できる可能性があります。

出土貝類の全データを用いて主成分分析を行ったところ、多くの貝塚は類似した特徴を示す一方、 福岡市の桑原飛櫛（くわばらひぐし）・糸島市の天神山後期層・同市の岐志元村（きしもとむら）・唐津市の赤松海岸・対馬市の佐賀（さか）貝塚の５遺跡が明確に異なる挙動を示しました。いずれも後期の貝塚で、遠賀川の西に位置します。

これらは、多様な貝種を幅広く採集し、特定種への依存が弱いという共通した特徴を持ち、縄文後期以降に採貝活動が多様化した可能性を示します。

赤松海岸・佐賀貝塚は木村氏の D 類型に相当しますが、桑原飛櫛や岐志元村は砂泥性貝類も多く、D 類型とは異なる多様性を示します。

縄文中期末～後期初頭には、世界的寒冷化「4.2ka イベント」が生じ、列島各地の資源環境に影響を与えました。

遠賀川流域では、後期前半から内陸部での住居構築が増え、後期後半には沿岸遺跡が激減します。

これは、環境変動に対する内陸志向の適応を示すと考えられます。すなわち中期的な居住、生業システムの変化を表しています。遠賀川流域における居住や生業活動が変化し、居住・生業の場を内陸に移したと考えられます。

また、後期初頭には中津式・称名寺式土器の広域分布圏が成立し、九州にも影響が及びます。

土器の形態・装飾の共有は、広い地域間で情報交換が行われ、遠隔地集団間の結束やネットワーク強化の意図を反映している可能性があります。

また、広域土器分布現象と同時に在地の土器文化圏を横断する形で類似した土器が存在します。坂ノ下式土器や南福寺式土器分布圏に共通して九州西部に存在する箆削文土器がそれです。同土器の系譜は阿高式土器の文様の抽象化にあるとされ、赤色の精製土器です。

さらに、これまで後期中葉以降に出現すると言われていた祭祀儀礼の痕跡が散見されます。例えば諫早市の西常盤（にしときわ）・有喜（うき）貝塚では土偶が出土し、祭祀儀礼の活発化がうかがえます。

これらの出現時期は、生業・居住システムの変動期と重なり、社会的対応の一環として理解できるでしょう。

このように西北九州の貝塚分析から、縄文後期前半に

- 採貝活動の多様化
- 内陸への居住移動
- 広域ネットワークの形成
- 祭祀の活発化

といった複合的な社会変動が生じていたことが明らかになりました。

貝塚は古環境・生業復元の基礎資料であり、今後は全貝類データを用いた定量分析をさらに進めることで、縄文社会の適応過程をより精密に描き出す必要があります。

※以下、各貝塚の報告が続きます。

４「有喜貝塚について」　秀島貞康（諫早史談会）

【概要】略

５　「東名（ひがしみょう）遺跡からみえる縄文時代早期の環境変動と海域環境への適応」　西田 巌（佐賀市文化財課）

【概要】

- ５つの貝塚が存在
- 西側にも貝塚が遺る
- 遺跡の特徴は「かご」で、日本最古の籠が発見されている。全国で出土した籠の５０％を占める。
- 遺構は貝塚の他に炉跡、墓地、貯蔵穴
- アカホヤ降灰以前に廃絶
- 南九州系から北部九州系へ貝種が変化
- シジミ・ハイガイ・カキ・アゲマキ主体
- 2016（平成 28）年　国史跡指定
- 2028（令和 10）年秋　ガイダンス施設オープン予定
  埋蔵文化財センターの機能を付加

６　「轟貝塚ー国史跡指定に向けた調査と遺跡の実態についてー」
芥川博士（宇土市教育委員会）

【概要】

- 2022（令和 4）年に国史跡指定
- 轟貝塚にほぼ同時期の西岡台貝塚が隣接。両者の間には谷があり、

縄文海進時は分断。
- 轟貝塚は付近に湧水があり、曽畑貝塚も同様。
- 貝塚の範囲は１２０㍍×６０㍍　舌状台地先端部に立地。
- 遺構は土坑墓・集石遺構・焼土坑、廃棄土坑
- 貝塚の西側には試掘の結果、居住地ではないことが判明
- 明確なアカホヤ層は確認できなかった。南九州的な断絶はなかったか。
- 貝種は前期がハイガイ、ハマグリ、中期はカキ、後期はマテガイ、アゲマキ

７　パネルディスカッション

コーディネーター　福永将大、中尾篤志（長崎県教委）
パネラー　秀島、西田、芥川

〇パネルディスカッションの概要

【中尾】

本日のパネルディスカッションでは、まず「西北九州の貝塚の特徴」を中心に討論したい。続いて貝塚の変遷から社会変化を読み取り、最後に貝塚の保存と活用について議論したい。地域としては有明海沿岸とそれ以外の西北九州沿岸とし、それぞれ地域差があると考える。

最初に貝塚とは何かということから伺いたい。

【福永】

まず言えることは情報量が大変多いことである。骨、動物依存体が遺る。普通の集落遺跡の調査では分からないことが、貝塚の調査では分かるのが重要である。

【中尾】

貝塚の調査で何か工夫していることがあるか。

【秀島】

諫早市の有喜（うき）貝塚ではブロックサンプルをとって水洗する方法をとった。すべて水洗する東名（ひがしみょう）貝塚の方法が一番良い。

【西田】

佐賀市の東名貝塚では二つの貝塚を掘った。遺物の量が多いので金と時間の効率化、最適化を図らなければならなかった。発掘した遺物を収納した袋を重要度によって９種類に分けて分類し、序列化している。今は再整理（２巡目）を行っている。国の重要文化財指定を目指している。２巡目でも貝玉がでてくるので、回収した貝層を廃棄することは躊躇せざるを得ない。

【芥川】

宇土市の轟（とどろき）貝塚の調査前に西田さんの元に出向いて調査の指導を仰いだ。東名貝塚の調査方法を全面的に取り入れることは無理であった。轟貝塚は過去の調査の再調査であったため、ブロックサンプルで行い、

悉皆的には持ち帰れなかった。
【中尾】
貝玉の直径はいかほどか
【西田】
２枚貝のもので４ミリ、巻貝だと１㌢未満か。
【中尾】
　イワシの骨などは小さいので採集が難しい。ところで、西北九州の貝塚の形成時期はいつか。
【福永】
　九州で最も古い貝塚は、以前は轟貝塚であったが、今は福岡市の浜の町貝塚である。
【中尾】
　長崎県の古い貝塚は五島市の大板部洞窟にアワビの堆積遺構があり、塞ノ神式土器（早期後葉）や轟 B 式土器（前期前半）が出土している。
【西田】
　東名貝塚は塞ノ神 B 式土器（早期後葉）の時期に貝塚が形成されはじめた。今から約 8,000 年前と考えられる。
【芥川】
　轟貝塚の形成は轟 B 式土器の時期である。遺跡の形成は塞ノ神式土器の時期からであるが、貝塚は形成していない。
【中尾】
　早期末に海岸に居住し、貝塚も形成するようだ。なぜ塞ノ神式土器の時期に貝塚形成が始まるのか。背景に何があるのか。
【西田】
　縄文海進の海面上昇が落ち着いた時期があり、この時に貝塚形成が進むと考えられる。東名貝塚では淡水域になりヤマトシジミの割合が多くなる。
【中尾】
　東名は海水準の上下動を敏感に反映しているようだ。同遺跡の貝塚以外特徴は何か。
【西田】
　貯蔵穴がある。基本的には虫を殺すため、防虫殺虫効果を期待してのものである。最初は湧水を求めてやって来て、湧水利用の貯蔵穴であったが、海進後は潮汐による増水利用に替わったと理解している。
　東名貝塚の人々は狩猟採集に漁撈を加え、バランスよく陸海の食料を摂っていたことが分かる。
【中尾】
　海と山の両方を活用する生活がこの時期に形成されたことが判明したことは東名貝塚の大きな調査成果であったと思う。
　次は貝塚の形成時期と継続期間について伺いたい。有喜貝塚の形成時期はいつ頃か。

【秀島】
　遺跡の利用は並木式土器から阿高式土器の時期と考えている。
【中尾】
　貝層の形成はいつ頃か。
【秀島】
　並木・阿高の貝層は見つかりにくかった。
【中尾】
　有喜貝塚の場合、後期初頭以降、貝塚が形成されたという整理でよさそうだ。
【福永】
　九州の貝塚の形成は後期初頭が多い。遺跡の利用はそれ以前からある。貝塚の継続時期は山鹿貝塚や新延貝塚のように前期に形成され、後期まで継続する貝塚があるかと思うと、天神山貝塚のように前期に形成され、中期になくなり、後期に復活する貝塚がある。
【中尾】
　轟貝塚の場合はどうか。
【芥川】
　遺跡は３つの時期の貝層に分かれる。轟貝塚に隣接する西岡台貝塚では轟貝塚にない曽畑式土器の時期の貝層がある。両者は補完的な関係にあったのかもしれない。
【中尾】
曽畑貝塚はどうか。
【芥川】
曽畑式と市来式の時期の貝層がある。
【中尾】
　散発的形成の貝塚と継続的な貝塚があるようだ。地域差があり両地域に特徴がある。貝塚が盛んに形成された縄文後期の貝塚の特徴として有喜貝塚の遺物を解説してほしい。
【秀島】
　大形の石器が出ている。解体具、銛先も出ている。攪乱層より骨角器が出土しており、離頭銛としての使い方が考えられる。ヤスもあり、後期初頭には外洋性と内湾性の漁撈があったと思われる。事実、有喜貝塚周辺は江戸時代まで湿地帯であった。広い内湾的なものがあって、網漁があったのではないかと考えている。
【中尾】
　魚種はどうか。
【秀島】
　マイワシ、片口イワシが特徴的な魚種である。巻貝ではコシダカガンガラなど岩礁性の貝や、内湾性のシジミがある。
【中尾】

外洋性の銛は注目される。網漁は特徴的である。
【福永】
前期はハマグリ・マダイが多い。後期の特徴は岩礁性の貝である。
【中尾】
天草の沖ノ原貝塚の結合釣針や有喜貝塚の離頭銛の存在から、サメ・マグロなど外洋性の大形魚類の捕獲と、岩礁性の貝の採取が長崎県沿岸部の貝塚の特徴と言える。有明海沿岸の貝塚の特徴は何か。
【芥川】
マテガイやアゲマキが主体である。現代の状況と同じで、アサリが出ないのが現代との違いである。網漁はあったと考えている。
【中尾】
西北九州の貝塚は岩礁性の貝に特徴があったが轟貝塚はどうか。
【芥川】
中期はマガキで占められる。後期はマテガイが多い。
【中尾】
後期には有明海でも貝塚が増える。マガキが多い。単純な貝の構成かも知れない。有明海沿岸に立地する諫早市の西常盤貝塚の特徴は何か。
【秀島】
マガキが多い。マガキの左右が同数出土している。そのため、カキ床があったのではないかと推測している。マガキを養殖していたのではないか。
【中尾】
石器や土器を汀線付近に捨てて、それにカキが付くという話は大変面白い。カキが付着した石器が展示されていた。
後期の貝塚は両地域で特徴が異なるようだ。西北九州では岩礁性の貝、サメ・マグロなどの外洋性の魚、釣針・離頭銛などが目立つ。一方の有明海沿岸ではマガキ、マテガイなどの干潟・内湾性貝類と内湾性のクロダイ、沿岸性から外洋性のイワシが多いと整理できる。
九州の貝塚は後期のある時点でなくなるが、縄文時代の貝塚の終わりの時期はいつぐらいか。
【福永】
西北九州の貝塚では後期中葉の北久根山第二型式である。
【中尾】
有喜貝塚ではどうか。
【秀島】
報告書の土器分類の８類と９類くらいで終息する。
【中尾】
御手洗Ａなど後期中頃の土器の時期であろう。轟貝塚はどうか。
【芥川】
後期の貝層は検討課題である。貝塚の終焉は御領式土器が出てくる頃かと思う。

【中尾】
　熊本市の黒橋貝塚は後期前葉を中心とする貝塚だが、後期の中頃で衰退している。御領貝塚はシジミという単一の貝で構成されており、異質な印象である。
【福永】
　遠賀川流域では後期中頃に沿岸部の利用がなくなって内陸部に移る。このような現象は列島規模で起きている。内陸の遺跡で打製石斧が出現し、縄文農耕論とも関係してくる。貝塚がなくなる時期とも符号する。北部九州でも同じ現象が見られる。
　さらに西常盤貝塚の土偶に象徴されるように後期中葉以降、祭祀遺物が出土している。寒冷化の影響かどうかは、よくわからないが、影響しているという見解もある。いずれにしても列島規模の居住変化であり、何らかの環境変化があったとみられる。後期中葉は過渡期で流動的である。後期後葉には生業の落ち着きが見られる。
【中尾】
　長崎県でも『西海考古』創刊号誌上で、福田一志氏が西平式土器を境に沿岸から遺跡がなくなり、内陸へ動くと言う重要な指摘をしている。このような変化の背景には、社会的ネットワークが東日本から入ってくることがあるのか。
【福永】
　難しい問題である。状況証拠として広域的に同じ土器を共有するという現象がある。中期と異なるのは地域的なものと広域的なものが併存することである。違う集団の文化を取り込む傾向がある。磨消縄文の広がり、注口土器の出現、箆削土器の出現などである。
【中尾】
　広域的に似たような土器が出てくることは面白い時期である。有喜貝塚でも磨消縄文の市来式土器が出土している。
【秀島】
　脚台付の香炉形土器で、マジカルな要素がある。
【中尾】
　台付の皿である。市来式土器で南九州の人々との関係も窺える。
さらに黒橋貝塚から堀之内式の鉢が出ている。轟貝塚の後期の土器はいかがか。
【芥川】
　磨消縄文はたくさん出ている。
【中尾】
　黒橋貝塚では腰飾りが出ており、有明海沿岸でも東日本の影響が見られる。広域的な取り組みによって環境の変化を乗り越えようとしていることが窺える。

この後、ディスカッションの話題は各貝塚遺跡の保存活用の紹介に移るが、
本稿では割愛するー　。